

## 四国民放クラブ日より

## 私の音楽遍歴

河野 照雄 (RKC)

アルゼンチン・タンゴ編

前回と同じく、高校時代の文化祭で、舞踏部の発表会で、裏方の皿回しでかけた曲が、フランシスコ・カナロ楽団の『ラ・コンパルシータ』でした。この時からキューバ・メキシコ音楽からアルゼンチン・タンゴに移行しました。

しかし、当時は「ダンスホール」の流行で、私も、東京の山手線・新大久保駅前にあった大久保舞踏学校へ、ラテンダンスを6ヶ月間練習に通ったことを思い出しました。

ダンスホールの衰退とともにすっかり忘れ去りました。

アルゼンチンタンゴの魅力は、バンドネオンの独特の演奏法と、バイオリンとの絡み合いにあるように思われます。

カナロ楽団の、『ラ・コンパルシータ』をはじめとして、『ガウチョの嘆き』『ホテル・ビクトリア』『黄金の心』など、名演奏が数々ありますが、カナロ楽団のほか、私の好きな楽団は、「ファン・ダリエ

ソ楽団」、「ロベルト・フィルボ楽団」、「オルケスタ・ティピカ・ビクトル」、「アニバル・トロイロ楽団」などまだまだあります。

次に、楽団に関係なく好きな曲は『フェリシア』『カミニート』『アディオス・パンパ・ミア』『エル・チョコロ』『7月9日』そして『ジラジラ』です。

『ジラジラ』といえは、リタ・モラーレスの歌声ですが、ここではやはり、日本の藤澤嵐子でしょう。夫君の早川真平とオルケスタティピカ東京との演奏は、唯一ではないかと思えます。

ここでは、アルゼンチン本国のタンゴについて考えたいと思えます。

私が、最初にタンゴを聴いたのは、先に書いた通り、フランシスコ・カナロ楽団の『ラ・コンパルシータ』で、当時は、SP盤でした。私が購入できた頃はLP盤。

まさかCD化がこれほど早く進むとは思わなかったです。最近は、CD盤を聴く機会が、メインになっています。

さて、カナロは、1888年生

まれなので、私が知ったのは彼が、67歳頃となります。そして、78歳で亡くなるまでの3年前に初来日しています。

次に、カナロ楽団の曲ですが、『ラ・コンパルシータ』で後半にマリオ・アロンソの歌が入っているものが、一番だと思えます。次に持つてくる曲が、迷うところですが、私は『黄金の心』カナロ作曲のワルツで傑作でしょう。カナロ作曲で『ガウチョの嘆き』歌アルベルト・アレナスと『さらば草原よ』そして、ファン・デ・ディオス・フィリベルト作曲の『バンドネオンの嘆き』『カミニート』『ミロンガの泣く時』と続きますが、私は、オルケスタティピカ編成楽団より、ここ数年は、四重奏をよく聴いています。なかでも「セントナリオ四重奏団」の「タンゴ創世記」レーベルを聴いています。

指揮・ギター：エドゥアルド・アンヘル・バージェ、バンドネオン：ニコラス・バラシーノ、バイオリン：ミゲル・アンヘル・タバダ、フルート：フェルナンド・キロガの4人の演奏です。

全16曲どれもよい演奏ですが、『エル・トリジャドル』『エル・

チョコロ』『ドン・エステバン』などが好きな曲です。

私がラジオ放送担当時代に、毎週水曜日に、30分番組の『タンゴの時間』を、6カ月間担当しました。その間に、東芝EMIの中島栄治氏が来社され、いろいろと教訓をいただき、その時『フランシスコ・カナロの生涯』10枚組を発売されると聞き、早速お送りいただき、今も大事にしています。同時にフォルクローレの話があり、この時点から、私はフォルクローレへ方向転換することとなります。

前回取り上げた、『ラテン高知』で、アルゼンチンタンゴの解説を担当していましたが、高知放送唯一タンゴ好きのN氏が入会され、解説されることとなり、私はフォルクローレ担当となりました。

今回は、フォルクローレをお話しします。



『フランシスコ・カナロの生涯』  
全10巻 (CD)